故国を後にして(1)

手の中にどんぐりといふ故国

モーレンカンプふゆこ

私は日本を二度後(あと)にした、と思っている。一度目は二十二歳横浜の港を離れて、太平洋に漕ぎ出した時だ。

五月晴(さつき)れ家出国出の太平洋駆け切る波は無限より来し

未知の世界への出発は、希望に満ちていたようである。

生活に追われてなかなか思うように帰国できなかったそれからの二十二年は、「望郷」という観念の日本に住むことになる。観念の日本とは、柿の木であり、お寿司屋さんであり、コスモスであり、あるいは「山吹きの花」という言葉であったりした。「心の故郷」

にしがみついていた訳である。

特定の明確なあこがれがあるということは、ある意味で幸福なことなのかもしれない。あこがれが成就した瞬間の充実感は、何の喜びにも代え難いものだ。国を出で波瀾万丈の十二年目、やっと良き家庭に恵まれて里帰りした時の、あのゆっくり下りゆく飛行機から見えた東京の灯。爆ぜた感動の瞬間を何と有難く思ったことだろう。そして又、六年後夢成って家族を連れて里帰りした時の、あの青田の美しさを、いったいどう説明したらよいだろう。

さやさやとそよぐ青田の陽の中を夢のうつつにさまよいて居り
さやさやとそよぐ青田の陽の香り幸みつけしよ遥かなれども
さやさやと青田の波に陽が揺れて渇きし我の心浸すも

禁固が五官の豊かさをもたらすという不思議な原則も、身をもって学んだ。

それが、日本に二十二年、外国に二十二年という、ある節目の年に、オランダの一冊の本と、その作者に出逢った。日本だけでなく、私の内にくすぶっていたあこがれ—人間共通の文学性というもの—を何としても成就したく、それから二年かかって、短歌俳句詩など五百程を英訳した。英国人の翻訳家が、誤りを正してくれた。最後には、同じ外国人である彼女もすっかり興奮して、共同制作をするものさえできてきた。まずは内容で勝負す

るしかない訳作にとって、ムードで悦に入っていた歌々が、哀れであった。それでも何とか英詩として成り立つ（といっても好き好きだが）ものが数篇できたその喜びの瞬間（あゝ、これを喜びといわずに何といおう）よりどころとしていた心の故郷日本が、ふとその光彩を失ってしまったのである。これが二度目の出航となった。

空に星机上に熱き国言葉ふり返るまじ暗き渚を

未知の世界への出発に違いないが、この二度目の出航は、五月晴れより夜が、希望より不安がふさわしい、それでいて死場所を探すためのような、二度と帰ることなき毅然とした出発であるように思う。この自分の一首を口ずさむと、どこからか勇気が湧いてくるのである。

劇作家須藤出穂氏が私のドラマを作って下さった時、その中で引用なさった土屋文明の有名な歌がある。

魯鈍なるあるいは病みて立ちがたき来りすがりぬこの短き日本の歌に

私はこの歌がたまらなく好きである。日本へのあこがれが消え去った今、一段と心に沁みるのである。もうあの青田波をあんな風に恍惚と思うことはないかもしれないと淋しく

は思うのだが、その代りに、何か新しい大陸が発見できるかもしれない。

オランダには人工の森がたくさんある。森の中にはつつましい菜園があったりして、その垣根に沿って菊やコスモスが揺れている。山路のようなうっそうとした森の道にはどんぐりがいっぱい。オランダ語も何とか分かるようになって、昨日は若い生徒達と笑い転がる日本語レッスンとなった。私もゆっくりとどんぐりを拾おう。「来たりすがりぬこの短き日本の歌に」……一九九一年、やっと数篇から成る訳詩集ができそうである。

手の中にどんぐりといふ故郷あり

（歌人・アムステルダム補習校）